

◇特集◇

## 社会的降格：歴史学と社会学の視点の交差

趣意説明

川野 英二

本特集は、2015年3月25日(水)と3月26日(木)にパリのフランス国立社会科学高等研究院(EHESS)で開催した、社会科学高等研究院=大阪市立大学共催国際共同シンポジウム「日仏の都市における社会・空間的降格——歴史学と社会学の視点の交差」をもとに、フランス側の登壇者の報告原稿の一部と新しい論考を訳出したものである。ここでシンポジウムすべての報告内容を伝えることができないのは残念だが、今回の特集を企画した経緯について簡単に触れておきたい。

文学研究科の教員、佐賀朝(日本史)、伊地知紀子(社会学)、川野英二(社会学)の三人は四年ほど前から、都市の貧困や移民問題を主要なテーマとして「都市周縁研究会」を組織し、分野の垣根を越えて研究交流をつづけてきた。研究会はとくに海外との研究交流や共同研究を重視し、釜山大学校韓民族文化研究所とは毎年の研究交流を重ねているが、日本史教室と社会学教室の教員はフランスの社会科学高等研究院とも長年にわたる交流を重ねていたため、そのネットワークを活かし、2015年3月にフランス・パリで国際共同セミナーを開催するに至った。

フランス側からは、貧困の歴史研究の第一人者であるアンドレ・ゲラン、労働移民史のジェラルド・ノワリエルの歴史学者2名と、都市郊外のフィールド調査をつづけているミシェル・ココレフ、貧困の国際比較で国際的に著名なセルジュ・ポーガムの社会学者2名の合計4名が参加した。フランスの貧困、移民、郊外の問題について非常に高名な研究者が勢ぞろいで、日本側メンバーとはあまりにアンバランスな構成ではあったが、とくに互いのテーマが似ているためか、日本とフランス、歴史学と社会学という視点を交差させるという期待どおりの議論となり、セミナーは成功裏に終わった。

その後、学内向けの報告書は作成したものの、とくにフランス側の研究者から頂いた報告原稿をそのままにしておくのはあまりに残念であるので、研究会のメンバーで相談して、今回の特集を企画することになった。

共同セミナーのさいには、ゲラン氏、ノワリエル氏からは報告原稿を頂いていたので、それをそのまま翻訳して掲載することにした。ポーガム氏からも原稿を頂いていたのだが、よりブラッシュアップさせて論文として発表したいとのことだったので、彼の最新の論考を翻訳して掲載することにした。これは、共同セミナーの報告者であった川野英二と中條健志(UCRC研究員)が共訳した、セルジュ・ポーガム著、『貧困の基本形態—社会的紐帯の社会学』(新泉社:2016年)の「日本語版に寄せて」のためにポーガムが書き下ろしたものにさらに手を加えたものである。シンポジウムのテーマからはやや外れるけれども、市大メンバーの共同研究とも関わっており、ここで同様に訳出することにした。『貧困の基本形態—社会的紐帯の社会学』を手にとった読者にも、著者の最新のアイデアを知るよい機会であろう。

なお、国際共同セミナーのプログラムは以下のとおりである。

### 「日仏の都市における社会・空間的降格——歴史学と社会学の視点の交差」

於：社会科学高等研究院ラスパイユ・キャンパス

#### 3月26日(水)

- アンドレ・ゲラン(パリ第7大学) 「空間的降格：現代フランスの都市極貧にかんする歴史学的アプローチ」  
ジェラルド・ノワリエル(社会科学高等研究院) 「労働移民の空間(1880-1930)」  
セルジュ・ポーガム(社会科学高等研究院) 「21世紀における社会的に降格した地区：パリ郊外を事例に」

#### 3月27日(木)

- 佐賀朝(大阪市立大学) 「近代大阪の都市周縁—近世から近代へ—」  
島田克彦(桃山学院大学) 「近代大阪の下層労働者世界—1930年代の港湾労働者の事例—」  
ミシェル・ココレフ(パリ第8大学) 「フランス郊外の住宅団地におけるセグリゲーションと差別」  
川野英二(大阪市立大学) 「大阪における都市降格と空間的セグリゲーションの効果」  
伊地知紀子(大阪市立大学) 「在日朝鮮人をめぐる植民地主義とレイシズム」  
中條健志(大阪市立大学) 「統合」の問題性：ルクセンブルクにおける外国人受入政策をめぐる談話分析」